

古医方から蘭方・蘭学へ

——江戸時代中期の医療の動き——

日本医史学雑誌第五十二卷第二号
平成十八年 六月二十日発行
平成十七年七月十三日受付

長 与 健 夫
愛知県がんセンター・名誉総長

はじめに

室町時代の末期から信長・秀吉の安土・桃山時代を経て家康の江戸時代初期にかけて、一時南蛮医療の影響を受けた時もあったが、中国に渡り彼の地で朱子学の陰陽五行説を基調とした李朱医学を学んで帰国した僧田代三也(一四六五—一五三七)の弟子の曲直瀬道三(一五〇七—一五九四)が、それをわが国に馴染み易い道三流として京都の啓廸院を中心として拡め、しばらくの間はこの道三流がわが国の医療の主流を占めていた。

一、古医方の出現

しかし五代将軍徳川綱吉の元禄のころになると商業主義的な時代の影響もあつてか、朱子学の五臓六腑の説は観

念的で医療に適さないと批判する者が出てくるようになり、その先頭を切ったのが名古屋玄医（一六二八—一六九六）やそれに続く後藤良山（一六五九—一七二三）らであった。彼らの主張は「親試実験」という言葉で代表されるように、「医療を行うには」理論を云々する前に自分で試してみる“ というものであった。この考えは李朱医学以前の中国で張仲景が著した「傷寒論」の中で唱えた主張に通じるもので、復古的な意味もあって「古医方」と云われた。宝暦四年（一七五四）、わが国ではじめて解剖（腑分け）を行った山脇東洋（一七〇五—一七六三）もこの古医方の流れを汲む者で、彼はその後に著わした「蔵志」（宝暦九年・一七五九年刊）の中で、「理ハ或イハ転倒スベク、物イツクンゾ誣ウ（嘘をつく）ベケンヤ。理ヲ先ニシ物ヲ後トスル時ハ、上智モ失ウナキコト能ハズ。物ヲ試ミテソノ上ニ理ヲ載スル時ハ庸人（凡人）モ立ツルコトアリ」と云っている。東洋の行為はまさにこの古医方の精神の延長上にあるものであり、この教えが次に述べる合田求吾や永富独嘯庵、小石元俊ら山脇東洋の門人に受け継がれていった。

二、合田求吾と「紅毛医言」

合田求吾（一七二三—一七七三）は讃岐国（香川県）和田浜で代々医を業とする家に生れ三十才のころ汗・吐・下の療法を学ぼうと京都に行き、さらに数年後江戸へ出た折に、年に一回の参勤交代で長崎から江戸に出て来たオランダ商館長に随行する商館医から和蘭の医療について話を聞く機会があり、その話の中に長崎の大通詞で蘭書が解読出来るばかりでなく、医療の経験ももっている吉雄耕牛（一七二四—一八〇〇）が彼の家でオランダの医療について講釈してくれることを聞き知った。一見些細と思われたこのエピソードが求吾自身の将来のみならず、江戸時代後半以降のわが国の医学、医療の発展に大きく寄与する一つの先駆けともなった。

一旦郷里に帰った求吾は宝暦十二年（一七六二）に長崎に行き、耕牛の家塾で毎日時間を決めて内科を主とした

オランダ医療について原書からの和訳を聞きとり、その内容を筆録する日課を続け、それを二ヶ月半ほどの滞在中五冊の冊子に纏めてその第一冊の題目を「紅毛医言」とした。それまでオランダの医療は外科ばかりと思われていたこの時期に内科も秀でていることを教えられただけでも、この小冊子は大変貴重なものであったが、残念ながらこの冊子は求吾の周囲、周辺で読まれることはあっても幕末に至るまで刊行されることはなかった。(オランダ内科の詳細が知られるようになったのは津山藩医の宇田川玄随(一七五五—一七九四)の「西説内科撰要」(寛政五年・一七九三年刊)によってであり、この「紅毛医言」が草稿として纏められたのは「撰要」刊行の三十年も前のことであった。)

永らく讃岐の合田家に所蔵されていた「紅毛医言」は、求吾(強)のご子孫の合田貞五郎氏が整理整頓され、昭和の初期に呉秀三先生がこれを見て紹介され、はじめて陽の目を見るようになった。平成十一年(一九九九)に「医言」は、求吾実弟の合田大介の訳著「紅毛外科問書」とともに新設された香川県立歴史博物館(高松市)に合田家が寄贈保管されている。⁽³⁾

三、永富独嘯庵と「漫遊雜記」

山脇東洋には多くの門人がいたが、その中で一きわ目立つ存在であったのは長門国(山口県)豊浦出身の永富独嘯庵(一七三二—一七六六)であった。彼は幼少のころ神童といわれるほど惛発であったが長じて「独り嘯く」と云われるほどに個性の強い人でもあった。二十才になった宝暦元年(一七五一)に京都に出て東洋の薦め^{イサ}で越前の古医方家、奥村良筑のところ^{イサ}で吐方について修業したが意に満たず一時郷里の長州赤間関に帰って開業した後、宝暦十二年(一七六二)に弟子の亀井南冥と同道で九州に漫遊の旅に出かけ、その途次、長崎から郷里の和田浜に帰る途中、かつて面識のあった合田求吾と肥後の地で偶然出合い、求吾から前述したような長崎における経験談を聞

き、かねてから蘭方を学びたいと願っていた独嘯庵はその足で南冥とともに長崎行きを実行した。

求吾の場合と違って金銭上の余裕がなかったのか僅かの期間の滞在であったが、彼も耕牛から直接オランダの医学医療の話を聞き、知り得たことを「漫遊雜記」に記録としてとどめた。その中で注目すべきことは、病理解剖に關して彼が次のように云っていることである。「紅毛ノ政、人ヲ剥グコトヲ禁ゼズ。故二人ノ病治セズシテ死セバ之ヲ剥グ。是ヲ以テ諸病ノ因ルトコロ釈然トシテ掌ヲ指スガ如シ」と。いささか誇張きみの言であるが独嘯庵の性格を思わせる言葉でもある。イタリアのモルガーニが二千例を超える病理解剖から「疾病の座と原因」と題する論文を一七六一年に書いており、彼がその内容を知っていたかの如き言は、幼時、神童といわれた彼の面目躍如たるものがある。

独嘯庵はまた耕牛やその弟、大介の講釈からオランダ外科にも着目し、「乳岩（瘰）ノ治セザルコト古ヨリ然リ。而ルニ和蘭書中ニ言スルコトアリ。曰ク、ソノ初発梅核ノ如クナルトキ快刀ヲ以テ之ヲ割キ、後金瘡ノ法ニ從イテ之ヲ治スト。コノ言、味アリ。余未ダ之ヲ試ミズト雖モ書シテ後人ニ告グ」と記している。華岡青洲（一七六〇—一八三五）が彼の遺した記録を読んだか否かは定かでないが、その可能性は大いにあったと考えたい。⁽¹⁰⁾⁽¹²⁾

四、小石元俊と「元洩」

独嘯庵は長崎から大坂に戻って間もない明和三年（一七六六）に三十六才の若さで病死した。彼の遺志を継いだのが門人の小石元俊（一七四三—一八〇八）で、師の書き留めた「漫遊雜記」中に述べられている病理解剖のもつ意義について理解を持っていたであろうことは、彼の次の言によつて推察される。「医ノ未ダ臟ヲ知ラザルハ、以テ治ヲ用フベカラザル也。猶將ノ未ダソノ地ノ利ニ達セザルガ如ク、以テ其ノ兵ヲ用ウベカラザル也」と。正しい解剖の知識なしに治療を行うのは、將軍が地の利を知らなくて敵と戦うようなものだ⁽¹¹⁾と言っている。

杉田玄白(一七三三—一八一七)、前野良沢(一七三三—一八〇三)らの「解体新書」に深い感銘を受けた元俊は、天明六年(一七八六)江戸に出て、同じ小浜藩の先輩の玄白に会い、また「蘭学階梯」を著した大槻玄沢(一七五七—一八二七)に半か月ほど寄宿して教えを乞うたことが機縁となって、京都に帰った後、自身は蘭書が読めないで蘭語の達者な天文学者間重富(一七五六—一八一六)と相談して、大坂の傘屋の職人ではあるが天性語学の才のある橋本宗吉(一七六三—一八三六)を江戸の玄沢の「芝蘭堂」に送り込み、帰坂後彼の働きによって蘭方・蘭学を江戸から関西に拡め、その発展を確固としたものにした功績は高く評価されている。

漢蘭折衷から蘭方に踏み切った元俊の著「元沕」が天明八年(一七八九)の京都の大火で焼失したのは大変惜しまれるが、求吾と独嘯庵の長崎における耕牛との会合が二十年近い歳月を経て元俊をはじめとする門弟らによって実を結んだというべきであろう。⁽¹³⁻¹⁷⁾

おわりに

江戸時代も後期に入ると、それまでは漢蘭折衷派ともいわれてきた人達の中から蘭方を志す者も出はじめてきた。伏屋素狄(一七四七—一八一二)や華岡青洲(一七六〇—一八三五)らの独創的な研究がみられるようになったのもその頃のことであり、後期もその半ばを過ぎる頃になると緒方洪庵の「適塾」、佐藤泰然の「順天堂」、新宮涼庭の「順正書院」などのように蘭学者を育成する塾も出、またシーボルトやボンベなどの来日もあり、蘭方への傾斜は一層明白となった。

幕末から明治維新以降のことはこの論文のワクを超えるものであり、また周知の事柄でもあるので触れないが、最近になって一時存在感の稀薄であった漢方が洋方治療の“泣き所”を埋めるかのように復活のきざしをみせている。今後わが国の医学、医療の世界はどのようになっていくのであろうか？

参考文献

- (1) 富士川游、小川鼎三校注 漢蘭折衷派・山脇東洋 日本医学史綱要 二、東洋文庫二六六、十一頁 平凡社(一九八六)
- (2) 小川鼎三 古医方の勃興と隆盛・日本最初の人体解剖 中公新書 三九、一〇三―一一頁 中央公論社(一九八〇)
- (3) 合田求吾(強) 「紅毛医言」 卷一―五 合田家藏書、手書き、和綴写本
- (4) 大久保謙一 讃岐の名医、合田求吾先生と最初の蘭方内科書「紅毛医言」 東北帝国大学医学部、良陵会、三五 昭和一一(一九三六)
- (5) 富士川游 温恭合田求吾先生 中外医事新報一二三九 昭和一二(一九三七)
- (6) 長与健夫 合田求吾の「紅毛医言」について、四八七―四八九頁 日本医史学雑誌、三十八卷、三号 平成四(一九九二)
- (7) 胡光 紅毛医術の伝播と長崎 ――合田求吾、大介の足跡を通して、四二―四七頁 中村質編「開国と近代化」 吉川弘文館 平成九(一九九七)
- (8) 宗田一 八一―四 古方派と蘭学と、永富独嘯庵の言、一七四頁 図説・日本医療文化史 思文閣出版 平成一(一九八九)
- (9) 中野操 永富独嘯庵(九頁) 大坂蘭学史話 一―一 思文閣出版 昭和五四(一九七八)
- (10) 中野操 薄命の医傑・永富独嘯庵、三五―三九頁 大坂名医伝・大坂蘭学史談 思文閣出版 昭和五八(一九九三)
- (11) 古賀十二郎 吉雄流の開祖・吉雄耕牛、一六八―一八三頁 西洋医術伝来史 形成社 昭和五四(一九七八)
- (12) 富士川游 「訳解・漫遊雜記」 永富独嘯庵先生伝補遺 日本医学史 決定版 日新書院 昭和一六(一九四二)
- (13) 長与健夫 永富独嘯庵から小石元俊へ ――江戸時代中期の医の先哲 ―― 日本医史学雑誌、四十七卷、四号 平成二三(二〇〇一)
- (14) 長与健夫 病理解剖の先覚者・小石元俊のこと 日本医事新報、三三四 昭和六三(一九八八)
- (15) 山本四郎 「小石元俊」 人物叢書、一四三 昭和四二(一九六七)
- (16) 中野操 「大坂蘭学史話―小石元俊」 「医学史話」 思文閣出版 昭和五四(一九七九)
- (17) 藤野恒三郎 「医学史話」・小石元俊 菜根出版 昭和五九(一九八四)